

「この子とそれ」

—2稿—

2026/6/29

米俵

〈人物表〉

瀬尾 あやか (26) 会社員

宮坂 達也 (29) 会社員

ハル 達也のペット・ミニブタ

1. 達也の部屋・リビング(昼)

綺麗に片付けられた部屋。棚には、豚の置物、ペツ
ト(ミニブタ)の写真が置かれている。

宮坂達也(29)がドアを開けて入ってくる。

瀬尾あやか(26)、入口の少し前で立ち止まって
いる。

あやか「……ほんとに大丈夫かな？」

達也「あやか、ここまで来て帰るの？」

あやか「でも、緊張する。嫌われないかな？」

達也「ハルに？ 俺に？」

チラツとあやかを見て、

達也「あー、どうかな」

と、意地悪そうに笑う。

あやか「ちよっとー」

と、嬉しそうに笑う。

ミニブタ(以下、ハル)が2人の方へ寄っていく。

あやか、緊張した様子でゆっくりと近付いて、

あやか「ハルちゃん、はじめまして」

ハル、あやかのバッグの匂いを嗅ぐ。

達也「ハル、だめ。お客さんの」

あやか「いいよ、いいよ」

達也「ごめん。新しい匂い、すぐ嗅ぐんだよ」

あやかの手元に触れ、バッグを棚に置くよう誘導。

達也「噛むかもしれないから」

あやか「えっ、噛むの？」

達也「人は噛まないよ。安心して」

あやか、ゆっくりと手を伸ばし、ハルに触れる。

ハル、あやかにぐいぐいと近付く。

あやか「かわいいー」

達也、キッチンへ。

あやか、ハルを撫でながら、

あやか「達也、どうしょ。可愛すぎるー」

達也、あやかの様子を嬉しそうに見る。

達也「ハルと遊んでて」

あやか、慌てて立ち上がり、

あやか「ごめん。手伝わ」

達也「じゃあ、ハルと仲を深めて」

あやか「それ、手伝い？」

達也「一番助かる。今後のためにも」

ハル、鼻先をあやかに押し付ける。

達也「ほら、ハルも言ってる」

あやか「……じゃあ、任せれます」

と、ハルを撫でる。

× × ×

あやか「かわいいー。ハルちゃん、あと一枚」

あやか、ソファアでハルの写真を撮る。

ダイニングテーブルにはサラダ、ドリンクが準備されている。

達也「ご飯できたよ」

あやか「ありがとう」

あやか、名残惜しそうにハルを撫で、ダイニングへ。

達也、生姜焼きをあやかの前に並べる。

あやか、席につきかけて、一瞬動きが止まる。

達也、向かいに座る。

達也「いただきます」

あやか「……ねえ」

達也「ん？」

あやか「これって……牛肉とか？」

達也、少し笑って、

達也「え？ 違うけど。牛肉の生姜焼きも美味しそうだね」

達也、肉を口に運ぼうとする。

あやか「ちよつと待って」

達也「どうした？ 嫌いなものでもあった？」

と、ゆっくり箸をおろす。

あやか「そっじゃなくて……よく食べられるなって」

達也「え？」

あやか「ハルちゃん飼ってて」

と、ハルを見る。

ハル、足元で眠っている。

達也 「えっ、肉のこと？」

あやか、黙っている。

達也 「ハルと、このお肉は違うでしょ」

あやか 「同じ種類……だよな」

と、達也を見つめる。

沈黙。

達也 「ハルの横で食うなってこと？」

あやか 「場所の問題じゃなくて……」

達也 「じゃあさ、オウムとかインコ飼ってる人は焼き鳥や唐揚げは食べないわけ？」

あやか 「オウムやインコは食べないでしょ」

達也、溜息。

達也 「あやかって、ベジタリアンじゃないよね？」

あやか 「違うけど」

達也 「牛肉食べるんだよね？ 鶏肉食べるんだよね？」

あやか、頷く。

達也 「豚肉も食べてたよね？」

あやか 「今、食べられなくなった」

達也 「都合良すぎでしょ」

あやか 「都合いいこと言ってるのは分かってる」

達也、白米を乱暴に口に入れる。

達也 「それで？」

あやか 「ハルちゃんのこと、さっきまで撫でてたんだよ」

達也 「うん、知ってる」

あやか、生姜焼きを見つめる。

あやか 「そのあとに、急にこれをただのお肉として見ろって言われても無理」

達也 「だから、ハルの肉じゃないって」

あやか 「お肉が生き物に戻った感じ」

達也 「全部生きてたものだよ」

あやか、少し考えて、

あやか 「簡単に分けるのが無理ってことかも」

達也 「分ける？」

あやか「この子はこの子。それはそれ、みたいに」

達也「簡単じゃないならいいの？ 泣きながら食べたら？」

あやか「そういうことと言ってないけど」

達也「でも、そう聞こえる。苦しんで食べたなら許せるの？」

あやか、黙る。

達也、ドリンクを飲み干す。

しばらくの沈黙。

あやか「ねえ……なんでミニブタなの？」

達也、少し考えて、

達也「あー。流れで」

あやか「流れ？ そんなので飼うの？」

達也「……ペットシヨップで。可愛いなって」

と、箸置きを無駄に触る。

あやか「今……嘘ついた？」

あやか、達也を責めるように見つめる。

達也、うつ向いて、

達也「ごめん」

気まずそうに、

達也「……元カノが置いてった」

あやかの表情が固まる。

あやか「そう……」

足元のハルを見る。

あやか「元カノは思い出さない？」

達也「全然。元カノは元カノ。ハルはハルだから」

あやか「なんか……そういうの上手いね」

達也「え？」

あやか「別のところ」置くの

達也「なにそれ」

沈黙。

あやか「私も別れたら、そっち側か」

と、達也を見つめる。

達也「なんで急にそんな……」

あやか「本命は本命。遊びは遊び」

達也「今度は浮気の話？」

あやか「そう分けられそうだなって思っただけ」

達也「想像だけで言われても……」

あやか、何か言おうとするが、やめる。

達也「俺はただ、目の前のものをその時々で大事にしてるだけ

だよ」

あやか「線を引いてでしょ？」

達也「そうかもしれないけど。元カノの時は元カノ。今はあや

か。ハルは家族で、これは食事」

と、生姜焼きを見つめる。

達也「その何が悪いの？」

あやか、ゆっくりと立ち上がる。

ハル、それに合わせて起き上がる。

あやか「ごめん。やっぱり、食べられない」

あやか、自分の生姜焼きにそつと手を合わせ、キツ
チンにさげる。

達也、皿がなくなった場所を見つめる。

サラダを口に運ぶ。

あやか、キッチンから戻ってくる。

テーブル脇の床に腰をおろす。

ハルが近付いてくる。

あやかの足の間にハル。

あやか、ハルと一緒に達也を見上げる。

あやか「いいよ。達也、食べて」

達也「……」

あやか「ハルちゃんはハルちゃん。それはお肉なんですよ？」

達也、大きく息を吸い、背筋を正す。

箸を持つ。

生姜焼きをつまむ。

ハルを見る。

あやかを見る。

達也「ハルのこと、使うなよ」

あやか「使っていない。達也の言ってること、見たかっただけ」

達也、口に運ぼうとして止まる。

ハルが鼻を鳴らす。

ハル、あやかの足の間から抜け出す。
あやか、ゆっくりと立ち上がる。

あやか「今日は……帰る」

バッグを棚から取る。

達也、あやかを黙って見ている。

あやか、出ていこうとする。

ドアの前で立ち止まる。

ハル、あやかのバッグに向かってくる。

バッグの匂いを夢中で嗅ぐ。

あやか「ハルちゃん、だめだよ」

ハル、バッグを噛む。

あやか「だめ！ それ高いの！」

達也「……それ」

あやか、ハツとして、バッグを胸に引き寄せる。

達也「革、だよね？」

あやか、黙る。

達也「牛革？」

あやか、否定しない。

達也「まさか、豚じゃないよね」

あやか、バッグを抱えて固まる。

ハルを見つめる。

達也に視線を移す。

何も言わず、足早に出ていく。

ドアが閉まる音。

静寂。

ハル、あやかが去ったドアを見つめている。

しばらくして、達也のもとに近付いてくる。

達也、ハルを見る。

目の前の生姜焼きを見る。

箸を取り、生姜焼きをつまむ。

口に運ぼうとする。

ハルが鼻を鳴らす。

達也、止まる。

目を閉じる。

唾を飲み込む。喉が動く。

つまんだ肉をゆっくりと皿に戻す。

箸を置く。

ハル、達也の足元に鼻を寄せる。

達也、ハルを撫でる。

ふと、テーブル脇の床を見る。

あやかが座っていた場所には、もう何も無い。

(おわり)